

中般若北浦遺跡

発掘通信 2号

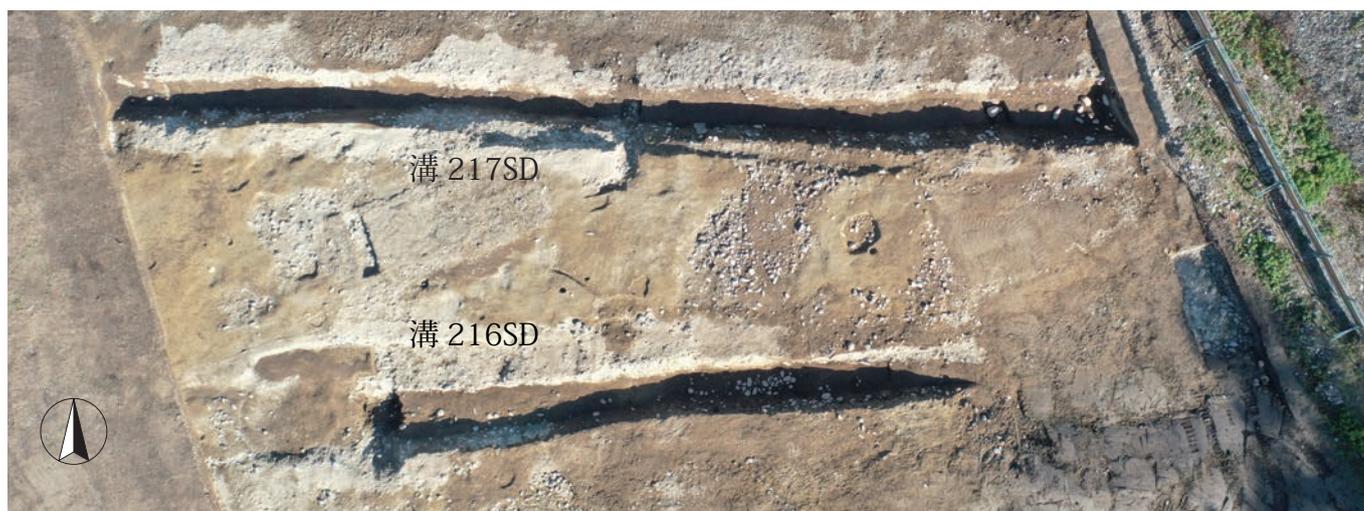
R5年 1月10日

○23年度の調査が終了しました。

今回の調査を行った遺跡は、江南市の北東端にあります。^{おかこいつみ}御囲堤の北側に位置しており調査区の北側には木曾川が流れています。川に近いので、大きい^{れき}礫が堆積したところもあります。

○今回の調査成果

南側と北側の調査区で様相が大きく違いました。南側の調査区からは、方形の遺構が多く確認できました。その中でも注目される遺構は、^{へんべい}扁平な円礫を方形に敷き並べた敷石遺構(061SK)、円礫数個が並べられた配石遺構1基(029SK)、河原礫(平礫)25cm程度の平らな河原礫が1点だけ確認できる遺構(5つ)と合計7つあります。自然ではなく意図的に配置された礫です。北側の調査区からは、過去の河川流路跡が複数確認できました。また、2条が並行して直線的に延びる東西方向の溝(216SD・217SD)が確認されました。この溝は、大きさもほとんど同じで調査区外へ続きます。出土遺物では山茶碗多数のほか^{すりばち}播鉢、天目茶碗、壺や甕、中国産の青磁碗や皿など鎌倉・室町時代～戦国時代の陶磁器類があり、このほか鉄製品や古銭、魚網に付けるおもり(土錘^{どすい})などが見つっています。



▲23年度調査区北側(真上から)



▲23年度調査区南側(真上から)

敷石遺構 (061SK) は 1.3 × 2.5m の範囲に扁平な礫が 20 個以上並べられていました。大きさはほとんど同じ大きさで 20cm 以上～ 30cm 程度です。新しい時代の掘り込みがあったため一部礫が外されていましたが、礫が北東方向に延びる向きに置かれており、意味があると考えられます。出土遺物は少ないですが鉢などが確認できています。遺構の東側は、この遺構の近くから鉄製品や古銭（渡来銭）も確認できたので中世墓の可能性はありましたがはっきりとした埋葬施設は見つかりませんでした。



▲ 061SK 敷石遺構 (北から)

配石遺構 (029SK) は、直径 1.2m の円形の土坑として見つかると一部攪乱（昭和の畑を耕した後か）が見られました。真ん中が少し凹んだ平らな河原石が中央に据えられ周囲は円礫で支えられています。



▲ 029SK (北東から)

大型の溝 (216SD・217SD) は、北側調査区の真ん中に近く、216SD は、深さ 2.2m、幅 2.8m 長さ 20m 以上です。遺物は、天目茶碗や播鉢、灰釉や鉄釉の皿、土製の鍋、鍛冶作業を行った痕跡の鉄滓のほか、灰釉四耳壺や常滑窯産の壺、中国産の青磁短頸壺など火葬骨を納める蔵骨器として使われそうな陶磁器が出土しています。6m 北側で並行に延びる 217SD からは主に山茶碗片が出土しました。217SD は、深さ 1.5m、幅 2.3m、長さ 20m 以上あります。



▲ 216SD 青磁の皿

○まとめ

遺跡周辺は、木曾川が近く、水が付きやすいところだったと思われます。そのため建物が立ちにくい立地であり墓域としての可能性があります。また、溝 2 条は、大型で並行なので墓域の隣接する道路の可能性があります。しかし、明治期の地籍図には、道路がないのではっきりとしたことは分かりません。今後の調査で明らかにできればと思っております。